

作文集

総合日本語 7 読む書く



平成 29(2017)年度 春学期

筑波大学 グローバルコミュニケーション教育センター



作文集を作ろう！

☆筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター（CEGLOC）ホームページ
日本語教育部門>日本語コース>学習の成果 Students' work
<http://www.cegloc.tsukuba.ac.jp/page/dir000804.html>
に作文を載せる



- ☆ A4 サイズ
- ☆ PDF ファイル
- ☆ 実名またはペンネームを書く
- ☆ 選んだ作文課題を書く

作文1 __相手の立場から論述する『ダニエル先生ヤマガタ体験記』

作文2 __複数の立場から論述する『日本語は「空気」が決める』

作文3 __登場人物の立場から論述する『ぼくらの七日間戦争』

<手順>

- ① クラスメイトに読んでもらう
- ② 評価シートでチェック
- ③ 載せたい作文を選ぶ
- ④ 作文を修正する

<宿題>

レイアウトを工夫して、word で作成

Manaba に提出

締め切り： 7月16日（日）

→提出後

- ・先生が確認してから PDF にする
- ・CEGLOC ホームページに載せる

感

想作文

「**ダニエル先生ヤマガタ体験記**」という本は、アメリカ出身の

ダニエル・カールというアメリカ人が山形県に来て、自分が山形県で体験したことを書いた本である。本稿では第二章「山形弁の達人を目指して」を取り上げる。

第二章には山形弁が中心になっている。ダニエルが初めて山形県に来た。その後、山形弁の言葉の壁にぶつかったダニエルが、引き添えのオンバ先生に引きずられて、今度自分の職場となる県庁に向かった。その時から、ダニエルが職場に着いた後「ンダの世界」にぶつかった。山形弁は標準語と大きな違いがあるというショックを受けた。「です」の代わりに「ダス」、日本語には「ン」で始まる言葉がないのに「ンダ」という言葉がある。教科書にはない日本語を学んだ。それ以来、ダニエルは理解できない単語を聞いたら、その単語をメモに書いて、職場の人に聞いたりしていった。ダニエルは職場の同僚たちと接する上で、山形県の色々方言があるということに気づいた。山形弁はダニエルにとって、ちょっと難しい気がしたようだ。そして、山形弁の色々なバリエーションがあって、彼に不安をもたらしたようだ。

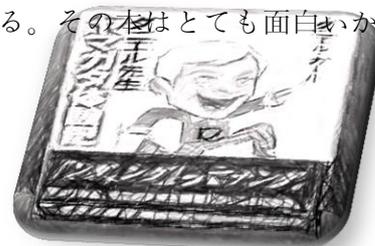
ダニエルが「ンダ」という言葉を初めて聞いた時の「ンダの世界」エピソードがとても面白かった。山形弁で「ンダ」という言葉は今まで勉強してきた日本語の中になくて、そして「ウンダ」「生まれた」と言っていると考えた。結局、彼が我慢をできず、その考えを試すため、電話口で「ウンダ」「ウンダ」と言っている先生に、「先生よかったですね、生まれたんですか？」と聞いてみた。その時のエピソードが私にとって、特に面白かった。やはり、標準語を勉強して、日本に来て、まったく違う日本語に聞こえて、勘違いしてしまう。それで、恥ずかしいことと面白いことも起こる。

ダニエルの体験記を読んで、私が日本で体験した、ある言葉が頭に浮かんだ。その言葉を思い出すと、それは「いいです」という言葉だ。ある日日本人と日本語で交流をしたときに、その日本人が「いいです」と返事をしてくれたので、私は「いいです」という言葉が「結構」という意味か、あるいは「良い」という意味か、戸惑った。私にとって、ダニエル先生の「ヤマガタ体験記」はとても勉強になった。本稿を読むと外国人にとってもわかりやすく書かれている。その本はとても面白いから留学生の皆さんにおすすめる。

ぜひ、読んでみてください。

引用文献

ダニエル・カール(2000)『ダニエル先生ヤマガタ体験記』集英社(集英社文庫)



ダニエル先生ヤマガタ体験記

『ダニエル先生ヤマガタ体験記』という本は、英語の先生をするために日本の山形県に来たダニエル・カールというアメリカ人が自分の体験を書いたものだ。本稿では第二章「山形弁の達人を目指して」を取り上げる。

第二章では、山形弁が中心になっている。ダニエル・カールが語る色々な場面とその場面によって山形弁を段々と学んでいくことが書かれている。ダニエルが山形に着いた後すぐ、山形弁は標準語と大きな違いがあるというショックを受けた。「です」の代わりに「ダス」、日本語には「ン」で始まる言葉がないのに「ンダ」という言葉がある、等の教科書にはない日本語を学んだ。それ以来ダニエルは理解できない単語を聞いたら、その単語をメモに書いて、職場の人に聞いたりしていった。

第二章の面白いエピソードはダニエルが日本語に「ン」で始まる言葉がないので「ンダ」は「ウンダ」（生まれた）だと思って、職場の人に「よかったですね、生まれたんですか？」と聞いてみたエピソードだ。やはり、教科書の日本語を勉強して、日本に来ると、全く違う日本語を聞いて勘違いしてしまう。色々な表現や単語が分からず、多くの恥ずかしいことや面白いことも起こる。外国人の私には、ダニエル氏の気持ちに共感することが出来る。

この本の面白いところは、日本に来る外国人の皆の困っていることを描いていることである。また、文章が分かりやすく、山形県と山形弁について多くのことを知ることができる本だと思う。そのため、日本語を勉強している人に役に立つと思う。

ぜひ読んでください。

引用文献

ダニエル・カール(2000)『ダニエル先生ヤマガタ体験記』集英社(集英社文庫)

作文1 読み手を意識して論述する

陈博恺

「ダニエル先生ヤマガタ体験記」という本は、アメリカ人のダニエル・カールが日本の山形県に教師として勤めるのをきっかけに、山形県の方言と接触し、山形弁についての様々な体験を書いたものである。本稿ではその本の第二章を取り上げる。

本来は英語を教えるために、ダニエルは山形県にきたが、着いたばかりのときから、新しい生活には山形弁があふれていることに気付いた。すなわち、職場でも日常の生活でも、接触する人々は標準語ではなく、山形県の方言を使うということだ。このような生活は外国人にとって大変に違うと思うが、ダニエル先生は自分で方言の意味を推測したり、指導課の同僚に聞いたりして、どんどん山形弁を使えるようになる。しかしながら、地元の人ではなく、その上に外国人だから、家族や友人との生活にもうまく理解できずに、話の意味をまちがえる場合もあり、笑い話になってしまうときもある。このように、ダニエル先生の面白い生活が展開する。

例えばあなたが新たな生活をはじめ、周りの人はほとんど君にとって理解できない言葉をしゃべっていることを想像してみよう。どうだろう。不安になるのか、怒るのか、みんなにとっては悪夢のはずだ。しかし、このような生活を直面しなくてはならないダニエル先生はきちんとこの問題を解決する。ダニエル先生も、直接に地元の人に聞くより、まずは状況と合わせ、自分で推測する。推測があっていない時でも、そのままに指導課の同僚から言葉の意味を求めめるのではなく、それを会話で試してみて、意味が通じるかどうかを確認する。こうしたら、自分の推測も確認できるし、言葉の意味も印象深くなるだろう。日本語専攻の私はいま日本にいるのに、理解できない言葉が出ると、すぐ中国にいた時のように電子辞書を出し、意味を探すのだ。「ああ、この意味だなあ。」と思い、満足する。しかし、次に同じ言葉が出たとき、「この言葉、見覚えがある気がするけれど、意味は何だっけ」と思い、悩んで電子辞書をもう一回取り出すのだ。何回もこのように繰り返す言葉もたくさんある。なぜかという、たぶん



私の言葉の学び方はただ字面に満足し、生活に活用する重要さを軽視しているからだろう。生活に優れている人は必ずいつも観察に富み、考えに富む。ダニエル先生のやり方はみんなの模範だともいえる。

本書のもう一つの面白いところはダニエル先生と家族のやり取りだ。妻がダニエル先生は外国人であることを考慮するけれど、妻以外のみんなはそこまで

考えずに方言を早口で言うので、ダニエル先生はいつもあいづちだけで何もできない。それで、答えなくてはいけない場合もあり、ただ問題を推測し、返事する。食事のとき、妻のお母さんは「もっと食べないか」の方言「マツカネカ？」で質問するけれど、その言葉の意味をよく知らないダニエル先生は「まだ金があるか」の意味と誤解し、自分の金を出したのだ。冗談みたいけれど、学習者はだれでもこのような時があるはずだ。例えば、先生が「だれかはまだ質問がありますか」と聞いたとき、ほとんど返事がなく、みんながうなずくばかりだが、全部理解できているということではなく、質問するのは恥ずかしいまたは面倒くさいと思っている人が多いからだろう。しかし、その問題を回避できない場合は笑い話をしでかすかもしれない。



この本はダニエル先生自身の物語だが、これから自分の経験や反省も見えるので、みんなもぜひ読んでほしい。

参考文献

エッセイ ダニエル・カール (2000) 『ダニエル先生ヤマガタ体験記』集英社文庫

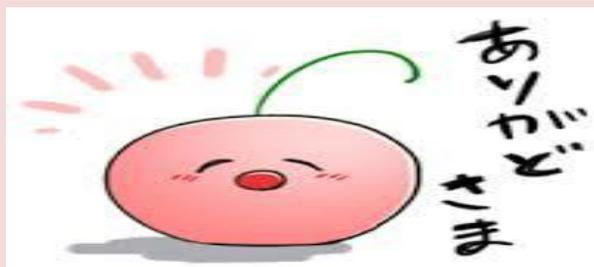
イラスト 1 <https://plaza.rakuten.co.jp/onepiecemosha/diary/200810170000/>

2 https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1398650193

山形弁とダニエル



ダニエル・カールは日本の山形県で英語を教える先生になったアメリカ人だ。山形県で体験したことについての本を書いている、その本のタイトルは「ダニエル先生ヤマガタ体験記」だ。本稿ではこの本の第二章を取り上げる。そこにはダニエル氏は山形弁を中心して、山形弁に関するどのような体験をしたのかということを書かれている。簡単に言うと、山形弁とは山形県で話されている方言だ。山形県で話されている方言は一つだけではなくて、様々だ。例えば、村山弁、置賜弁などの方言だ。ダニエル氏が働いていた指導課は様々な地域からの人がいて、方言のバリエーションがよく見える場所なのだ。



ダニエル氏が語ったものは全部面白いと思ったが、特に「んだ」の話が面白かった。ダニエルさんが働いている指導課の職員は皆電話で話す時、「んだ」ばかり言っていた。ダニエルさんは日本語で「ん」で始まる言葉はないことを知っていたので、皆が「生んだ」と言っていると思っていた。私は留学生としてその気持ちがよくわかる。日本語を勉強する時、使っている教材は標準日本語を中心するため、日本人と普通の会話をする時、日本人が使っている言葉や表現は時々標準語と全く違うことに結構びっくりする。ダニエルさんの場合、山形弁は標準語とは全然違うので、より大変になってしまった。また、ダニエルさんは彼が考えた「んだ」の意味が正しいかどうかを知るために先生に「先生良かったですね、生まれたんですか。」と言ってみた。この場面は非常に面白おかしいと思う。ダニエルさんがそれを言った後に感じた恥ずかしさは私も経験したことあるので、私は自分を鏡で見るような感じがした。

このエッセイを読んだ後、面白さをよく感じた上に、私もいつか日本語が上手になるという希望が大きくなった。私はよく「どんなに勉強しても、日本語は全然上手にならないし、イントネーションは日本人のように言えない」という気持ちになる。しかし、ダニエル氏の話を読んだり、授業の時にダニエル氏のビデオを先生にみせてもらったりした後、「日本語が本当に上

手ですごいなあ! アメリカ人でも、もし彼の姿を見ないで彼の話を聞いたら、「日本人だ」と思わせられる。じゃ私もできる!」と考えるようになった。

ダニエル氏が書いた文章は読みやすかったので、読むのは非常に楽しかった。それに加えて、文章でダニエル氏が使った比喻はとて面白いと思う。特に『方言の壁にぶつかった』という比喻は私に母語のアラビア語で読む小説のことを思い出させて、身近な感じがした。また、自分と同じような経験をしたことがある人の話を聞いたり読んだりすると、「私は寂しくない。私のように恥ずかしさやへんなことを体験している人が結構いる」と考えて、気持ちが楽になる。

みなさん、この本は本当に面白いので、是非読んでみてください。(^o^)

引用文献

ダニエル・カール(2000)『ダニエル先生ヤマガタ体験記』集英社 (集英社文庫)

イラスト:

1-<https://goo.gl/images/sCnf8N>

2-<https://goo.gl/images/dkUmlV>

ラーファト

『ダニエル先生ヤマガタ体験記』という本は、山形県で英語の先生をすることになった、アメリカ人のダニエル・カールが山形での様々な体験を書いたものである。本稿では第二章「山形弁の達人を目指して」を取り上げる。

山形弁というのは、山形県内のいろいろな方言の総称である。つまり、山形弁は特定の方言ではなく、その中でいくつかの方言に分かれている。例えば、村山弁や、米沢弁、寒河江弁など、全部山形県内の方言であるが、発音や言葉使いなどいろいろ違う。ダニエルは、こういう方言がたくさんある山形に来て、山形県庁の指導課に勤めていた。外国人にとって、日本語が話せても、方言まで理解することは決してそんなに簡単ではないだろう。そのため、第二章のタイトルの通り、ダニエルは山形弁の達人を目指してがんばっていた。彼は、知らない方言を聞いたあと、すぐ人に聞かず、まず自分でこの方言の意味を考える。自分が考えてから地元の人に聞いて、自分の考えが合っているかどうかを確認する。学んだ方言とそれに対応する標準語をノートに書いて、身につけた山形弁をどんどん積み重ねた。

もっともおもしろいエピソードは、ダニエルさんが「ンダ」を「生んだ」と聞き違えたことだと思う。山形弁で「ンダ」は相槌の意味で、よく使われている。最初に来るとき、ダニエルさんは「ンダ」をよく聞いていたが、意味が分からなくて「ンダ」に興味を持つようになった。しかし、彼はすぐに地元の人に聞かずまず自分で考えた。「日本語の中には『ん』ではじまる単語は絶対はない。」「『ん』の前に何かある。聞き逃しているかもしれない。」という発想があって、これは「生んだ」の意味だという結論が出た。地元の人に確認した後、「生んだ」の意味ではないとわかったが、人に笑われる勇気があって自分の考えをどうどうといえるのは、とてもすばらしいことではないだろうか。

ダニエルさんの話を読んでみると、共感がいろいろあった。なぜかというと、ダニエルさんが山形弁を勉強する経歴は、私が日本語を勉強する経歴と、非常に似ているからだ。ダニエルさんと同じで、私は日本語を勉強している最初るとき、「生んだ」のような笑い話もあった。でも、私より、ダニエルさんは言い間違いを恐れない、人に笑われることを恐れない。これは、私たち日本語学習者にとって勉強すべきところだと思う。

ダニエルさんの話を読むことで、山形弁もちょっとだけ話せた。外国人の視点から書いているので、外国人にすすめたい。でも、日本人も読んでみると、外国人の視点から新しいものを発見できるかもしれない。山形に興味がある人は、ぜひ読んでみてください。

劉 震

引用文献

ダニエル・カール (2000) 『ダニエル先生ヤマガタ体験記』 集英社 (集英社文庫)

作文2 複数の立場から論述する

マクレランド・セーラ

「方言で話す事」というテーマについて複数の意見がある。その意見は、人々の立場、経験などによって違うので、人々意見の根拠を分かるようになるために、色々な立場から見ると必要があると思う。これから、方言で話さない人々と方言で話す人々の二つの意見について調べたいと思う。

方言で話さない人々の立場から見ると、方言は要らないものだと考えられる。なぜなら、皆が同じ標準語で話せば、誰でも簡単に話し合う事が出来るので、その方がいいと考えられるからである。例えば、他の地域に旅行する時、その地域の人々が何を言っているのかが分からないのはとても不便である。その上、方言で話さない人々から方言で話す人々は下等や馬鹿などだと考えられ、軽んじられる事はよくある。つまり、標準語で話す人々にとって、「方言で話す人々は自分の下だ」のような考えは多くある。そのため、何故方言で話し続けているかは、方言で話さない人々にとって分かりにくいかもしれない。

しかし、方言で話す人々の立場から見ると、方言は大事なものだと考えられる。なぜなら、その方言は自分のアイデンティティーの一部であり、そんなに簡単に

変えるものではないからである。方言は小さい地域やその地域に住んでいるコミュニティに結ばれているので、同じ方言で話す人々の中には連帯感が強い。しかし、方言話者に関する固定観念のため、社会的に方言で話す事は大きいデメリットがある。例えば、その人々には都会でいい仕事を見つけたい時など、標準語で話す人と比べてとても難しいかもしれない。つまり、方言で話す人は、自分のアイデンティティーと自分の社会的な価値のどちらが一番大事なのかを決めなければならぬ。

私は、日本語を学ぶ外国人として、標準語だけではなく、本当に日本で話されている日本語を分かるようになりたいので、日本語の方言について学ぶのはとても面白くて楽しいと思う。その上、言語学を勉強している学生として、また家族が英語の方言話者であるため、方言には、アイデンティティーの深まりや、国語の展開の歴史など、色々な価値があるという事が分かる。方言に関する固定観念は簡単に壊せるものではないと分かるが、標準語話者はいつか方言の価値や方言で話す人々の気持ちを分かるようになったら、いい社会になると信じている。

引用文献

石黒圭 (2013) 『日本語は「空気」が決める―社会言語学入門』光文社 (光文社新書)

『複数の立場から論述する「日本語は「空気」が決める」』

ダリア

方言というのは共通語とか標準語に対して、ある地方で用いられる特有の言語ということである。それでは、各々の地域で使われている言葉を方言と呼んでいるが、石黒（2013）によると地域方言以外に、社会言語学では、階層など、社会的区別によって社会方言も分ける。つまり、方言は色々な影響で完成したものだ。方言の特徴は、人の地方の所属を決定することだ。各国では、方言が使われているが、日本は多くの方言の種類が使われている国として認められている。そのため、日本人と外国人にとって、方言で話すことと日本語にある方言の多様性についてどう考えるか調べてみる。

日本人の立場から見ると、方言は矛盾する感情を引き起こすものだと考えられる。方言で話せる人はそれぞれの方言は魅力があって、同じ地方の人たちを結びをつけると思う。それで、各地の方言は文化的遺産として守られ、世代から世代へと伝えられるものだと考えられる。そして、普段、方言を知っている人は標準語の代わりに方言を日常語として使う。理由としては、次のことが挙げられる。人は子供の時から方言が使われる環境にある場合は、無自覚に地域の表現を取り入れるようになって、方言を使うことが習慣になる。さらに、使っている方言はよく実家を連想させるから、人がどこにいても、方言は人とふるさとを結ぶ役割を果たす。しかし、方言を使わない首都出身者にとって、方言は仲間外れにされたような疎外感を抱くものだ。例えば、人が自分のわからない表現を聞いたとき、話の筋を失って、質問に答えられない。その場合には、日本語の枠内で不理解が起こって、同国人であってもお互いの話すことがわからなくなる。それで、方言が話すことができない日本人はコミュニケーションの単純化のために、標準語を使った方がいいと考える。しかし、日本人は日本語にある方言が消失しないように注意を払うべきだ。対策として、子供の時から国語を学んで、日常の生活に使うことである。それでも、皆が情報を理解するため、テレビやラジオなどで標準語を使った方がいいと考えられる。

外国人の立場から見ると、日本にある方言の多様性は国の珍しい特徴だと考えられる。しかし、日本語を知らない外国人は方言の区別にあまり気がつかないと思う。地域にかかわらず、日本語の発音はあまり変化しないため、言葉の意味を知らないと、言葉の違いが分かりにくいのだ。例えば、二ヵ月前に母が東京と沖縄に行って、彼女にその地域の方言がどのように異なるか聞いた。母は発音の差異を感じず、日本語は歌のように流れると答えた。また、海外に来るとき、普段、人は一番人気がある標準語の言葉や挨拶の言葉を覚える。例えば、日本語の実用会話書を見ると、挨拶の言葉として「こんにちは」や「こんばんは」などの多面的な言葉だけ挙げられるから、外国人は方言の挨拶の言葉を知らない。しかし、日本語を知っている外国人として、方言の問題はとても大事なことだと考える。方言の差異がわからない場合、表現の意味も分かりにくい。特に、東京で日本語を勉強する留学生は大阪に行ったとき、関西弁と関東弁の違いが気がつく。例えば、関西ではゴミを「捨てる」の代わりにゴミを「ほかす」と言う。つまり、日本語を知っている外国人と日本語を知らない外国人の立場が違っても、彼らにとって、日本語にある方言の多様性は日本文化の一部だ。

私は日本語と日本史を学ぶ学生として日本語にあるたくさんの方言は一定の条件のもとで起きたことだと考える。日本は山国なので、それぞれの地域が山に囲まれて、近所の地域と離れて人は自分の言語を使うようになった。そして、日本語が話せるため、方言の知識を持つことは必要だ。日本語を学ぶとき、方言に注目すべきなのだ。だから、「方言で話すこと」は国の長い歴史と伝統的な文化の兆しだと考える。

引用文献

石黒圭『日本語は「空気」が決める』光文社新書、2013

方言は人々の目にどんなものだろうか

ヨーコーブン

言語は人に自分の思いなど相手に伝えたい時使う道具のようなものと思われる。石黒(2013)によると、言語は統一していないものだ。国々の言語も違う特徴があるが、ただ一つ共通点があるのはどんな国でも方言があることだ。今回は日本語を中心に日本語の方言について論じたいと思う。

まず、日本人の立場から見ると、方言は出身を表すものだと考えられる。日本語は標準語というものがある。それは日本人の共通語というものだ。方言がある地域の人たちは自分の出身を表すため、会話中に自然に方言で話すこともある。それは決して悪いことではないと思う。方言を使うとき、標準語話者や自分の方言が分からない人でもわかりやすく使うなら、コミュニケーションもできると思う。

日本人なら方言をよく知らなくても、なんとなくわかるが、日本語がわからない外国人の立場から見ると、方言は日本語ではないと思うだろう。なぜなら、方言の発音は標準語の発音と違うところがある。例えば、標準語の「食べない」は関西弁の「食べへん」だ。発音は全く違うから、外国人は日本語の方言を別の国の言葉に勘違いする場合もあると思う。

日本語を知っていても、方言が理解できるとは言えない。日本語を学んでいる外国人として、方言はかなり難しいと考える。なぜなら外国人が勉強している日本語は標準語だ。方言を聞いても、それは新しい文法だと思える人もいるかもしれない。さらに、標準語と方言の困乱が起こるかもしれない。つまり、標準語の基礎がないなら、方言を勉強しても、うまく使えないということだ。

言語というのは使い手によって、効果が違う。方言もそうである。特定な方言に対するステレオタイプはその方言話者たちの性格を表されたものだと思う。それは決して悪いものではない。本来、言語というものは中性的なものであるからだ。

引用文献

石黒圭(2013)『日本語は「空気」が決める—社会言語学入門』光文社(光文社新書)

複数の立場に立って論述する

方言で話すこと

Huang Han

世界では色々な言語があり、それぞれの発音や語彙などは大きく違う。さらに、一つの言語の中でもバリエーションがあり、それは方言というものである。そもそも言語は変化しやすいものなので、地域ごとに必然的に多様化していく傾向があり、発音や語彙などの相違が生じる。人によって方言に対する反応も異なる。いくつかの例を見てみよう。

まず、日本人の立場から見ると、地域によって人は方言に対する評価は異なると考える。例えば、郷土意識が高い地域の人たちは、方言に好意的、お国言葉は劣等感を感じない。さらに、方言で話すことに誇りを持つ地域、例えば大阪、京都などでは方言を積極的に話す人たちもいる。一方で、郷土意識が低い地域の人たちは方言には好意的だが、お国言葉は劣等感を感じる。郷土意識がさらに低い地域は、方言に対して無関心、必要性も感じないということだ。特に、大都市の隣の地域は、郷土意識は低い傾向がある。つまり、帰属意識が高い地域こそ、自分の方言に好意を持っている。

また、劣等感を感じることは言語に悪いことではないが、社会的に、経済的に不利益が生じることにつながるので、方言は必要ないと感じてしまう。石黒（2013）では、「方言札」というものを述べた。沖縄の教師や親たちは子供の将来の幸せと願って、方言を話す生徒を罰した。このようなことによって、方言話者のアイデンティティを脅かし、さらに、方言は消滅してしまうのだ。

そのほか、日本では、好まれる方言ランキングがあり、一位は京都弁である。理由を尋ねると、京都と言え、歴史的建物、着物や芸妓などがイメージされ、古き良き日本のようにイメージが投映され、「京都らしいもの＝日本らしいもの」と理解されて、一番人気の言語になったことが分かった。それが理由で外国人が一番好きな都市に選ばれた。

日本以外の国にも方言がある。例えば、中国語や韓国語などの言語にも色々なバリエーションがある。韓国語の方言はそれぞれのイントネーションが違うので、日本語の方言を聞いたら、韓国のどこかの方言のようにと感じることもあるらしい（Lee & Ramsey, 2000）。中国語の場合は七つの方言に分けられ

(DeFrancis, John. 1984)、それぞれの差異が大きすぎて全く通じない状況となっている。さらに、日本語と違うのは、中国語の方言は好まれるランキングがないのだ。その理由の一つは、それぞれの方言は通じないので、評価することもできないからだと考える。

また、外国人にとって日本語の方言は面白くて、日本の文化を感じられるが、少し難しいものだと思う。前に北海道に行った時、道で会ったおばさんに私は話しかけられたが、さっぱり分からず、外国語にしか聞こえなかった。日本では、地域によって人の性格や町の雰囲気などとは全く異なり、その中に方言も地域の一つ特徴である。最近方言を使った観光の広告もよく見られる。方言を使うことで、その地域に特化したイメージを提供し、閲覧者の興味を喚起できるような伝え方を考えられていい取り組みだと思う。

方言は地域や歴史的な理由で生じるもので、日本人にとっては地域のイメージを表せ、同じ方言話者にとって親しみを感じられる。外国人にとって日本の面白さ、町の独特性が見られるものだ。

参考文献：

石黒圭 (2013) 『日本語は「空気」が決める』 光文社新書

Lee & Ramsey : The Korean language, 2000

DeFrancis, John, The Chinese Language: Fact and Fantasy,
Honolulu: University of Hawaii Press, 1984

2017年6月12日

総合日本語 7 読む書く

名前:チェン イエンチウ

作文2 複数の立場から論述する 「方言を話すこと」

石黒(2013)の冒頭では、投稿者から「方言がうらやましがられたり、馬鹿にされたりするのはなぜですか?」という問題が提出されていた。石黒(2013)によると方言は、その地域で暮らす人には生活実感のともなう、魅力的な言語だが、方言を話さない首都圏出身者にとって、仲間に外されたような疎外感を抱くものである。方言は人の矛盾するような感情が引き起されるというものだと考えられる。

日本語を学ぶ外国人の立場から見ると、方言は音韻や文法や語彙などに標準語と相違が生じて、感情がよく表せて面白いだけではなく、話す人と人の距離も縮められるものだと考えられる。この前に読んだ『ダニエル先生 ヤマガタ体験記』という本も方言で話すことについて、外国人のダニエル先生が山形弁を学ぶ時の経験を書いていた。始め、ダニエル先生は山形弁の意味がよく分からなかったが、山形弁を勉強することによって職場の人と仲良くなった。

また、台湾人として考えると、方言で話すことはその地域の感情に深く結びついて使われてきて感情を表すものである。台湾は小さい島だが、色々な方言があり、中国福建省の福建語から派生した台湾閩南語となった台湾語や、清代に台湾に移住した客家人が使用する客家語や、それぞれの原住民族の言語などがある。政治の原因で、台湾で広く使われてる主要な言語は中国語で、時代が変わって、方言を話す人はどんどん少なくなっている。しかし、日常会話で普通に使っている人もいる。特に高齢の人が多く、それはその人たちにとってこの地域での感情表現である。

私は日本語を学ぶ外国人の一人、また台湾人の一人としてと考える。標準語の方が理解しやすいが、方言は標準語より親しみやすく、地域性の強い言葉であるので、方言で話すことは、やはり欠かすことができないその土地の文化の一つだ。

参考文献:

- 石黒(2013)『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』(光文社新書)
- 中国語の「七大方言」の違いをまとめた一覧表
(<http://language-and-engineering.hatenablog.jp/entry/20120712/ChineseDialectsSummaryTable>)
- 方言 - Wikipedia(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B9%E8%A8%80>)

登場人物の立場から論述する『ぼくらの七日間戦争』

『ぼくらの七日間戦争』には、中学校 1 年 2 組のグループとその親たちのグループが登場しており、その中でも第一章である一日目には主に中学生のグループの話が中心となっている。この中学生の中でも私は主役である^{あいほらとおる}相原 徹の視点からこの話について論述してみようと思う。右のイメージの中では銃を持っている男の子だ。



相原徹は六月の初めに、解放区を作ろうとクラスメートの^{きくちえいじ}菊池英二を誘った。彼は英二と相談して、1 学期の最後の日に荒川工機という会社に解放区を作ることにした。その後、同じクラスの男子全員を誘った。そんな中、^{なかやま}中山ひとみと^{ほりばくみこ}堀場久美子から仲間に入れてほしいと言われたが、その要望を断って女子たちには解放区の外の様子を窺ってほしいと頼んだ。1 年 2 組の男子全員が解放区を作ることに賛成し、開始日の 1 週間前から解放区での準備を始めた。

相原は 1 学期の最後の日、クラスメートの仲間たちと一緒に解放区の放送を行った。この解放区には^{かきぬまなおき}柿沼直樹というメンバーだけ来なかったので、相原は彼が裏切ったと疑った。しかし橋口順子からの連絡で柿沼が誘拐されたことを知った。それから柿沼をどうするかについて仲間たちと相談し、^{なかおかずと}中尾和人の提案で「柿沼の手紙がほしい」と橋口順子から犯人に伝えてもらうことに決めた。柿沼は暗号の天才だったため、犯人に気づかれず自分たちに手がかりを伝えてくれると考えたからだ。そして、解放区の仲間たちとみんなで星を^{なが}眺めながら話をした。

相原徹という人物はかなりリーダーシップのある人物だと最初から思っていた。彼の決断力と行動力は大人にも見習ってほしいところがあるくらいだった。しかし彼の話し方や解放区に来なかった柿沼を疑ったことから見ると、思慮深くないように思える。このような性格から見て『ぼくらの七日間戦争』の主人公の役がどうして菊池英二になったのか分かった。私たちも、考えの深さと早い決断力を両立することは難しいと思われるが、弱点をカバーしてくれる仲間がいれば、優れたリーダーになれる可能性を秘めていると思う。

引用文献

宗田理 (2007) 『ぼくらの七日間戦争』ポプラ社

登場人物の立場から論述する

『ぼくらの七日間戦争』（宗田理(2007)）という話は、中学生の解放区について語る。東京下町の中学校の一年二組の男子生徒全員は一学期最後の日から姿を消して、自分の根城を作った。何も分からず街を走り回って子供を探した親たちに状況を教えるため、その夜に解放区はFMラジオ放送を行なった。その時の一番正反対な人物は、やはり宇野秀明と安永宏だ。両方ともその前、相原たちに誘われて、解放区を作る同級生の仲間になった。

全員集まって、初めての放送が終わったら、宇野は達成感でいっぱい「とうとうやったぜ」と言った。でも170センチの喧嘩っ早い安永は宇野に突っかかった。大嫌いなあだ名まで使って挑発されたから、怖くても、暗い部屋の三本だけの光でほとんど何も見えなくても勇気を出して負けたくなかった。しかしみんなに笑われて、落ち込んでいるところを日比野に助けられた。

一方、安永はあの日、人生で初めて何か大きなことをやっ
と行なって、FMラジオ放送のせいで頭が熱くなって、その気分を落ち着けるために興奮している宇野をからかった。周りのみんなもそう思っただろうから、問題はなかったのに、日比野が割り込んだ。彼は宇野みたいに易しい相手ではないけど、

とにかくその気持ちを発散したくて、喧嘩をしようと思った。だが天野に「デスマッチ」と名付けられた喧嘩はリーダーの相原が気に食わなかったから、始まる前に終わった。

それから宇野と安永は仲間たちといっしょに屋上に行った。それから柿沼直樹が誘拐されたと知って、彼をどうするか仲間と相談し、中尾和人の提案で犯人に柿沼の手紙を頼むことにした。最後に解放区のみんなで星を眺めながら話をした。

宇野さんと安永くんは対角のように全く違うことは明らかだが、本当はあの解放区のみんなが感じていたことはほぼ同じだったと思う。性格が違って、その緊張、興奮、不安は一緒である。

引用文献

宗田理(2007)『ぼくらの七日間戦争』、ポプラ社



作文3 登場人物の立場から論述する

六月の初めのことだった。クラブ活動のサッカーを終えた帰り道、並んで歩いている相原が友人の英治にぼつりと言った。「俺たちの解放区を作ろうと思うんだけど、お前参加しねえか」。そのセリフをきっかけとして、一年二組のクラスの男子が、大人たちとの戦いを始めようとしていた。

相原が以前に親に聞いたことがきっかけだった。それは相原たちがまだ生まれる前、大学生たちが権力と闘うために、バリケードを築いた。相原が思った権力は学校などの大人たちの世界だった。クラスの男子と一緒に子供たちだけの世界を作り上げようとしていた。結果的に大学生のバリケードは破られたのだが、相原が思っていたのは自分がやりたいことをやれば、負けてもいいということだった。要するに大人たちの言う通りしないで、自由な子供たちだけの世界を求めていたのだった。大人たちのやることに満足していないし、言いたいこともたくさんあるし、いっそ解放区を作ろうと英治に言った。それは子供たちの城になるからだ。相原と英治が手分けして、クラスのみんを誘った。結局みんなが賛成して、相原の案に乗った。しかし、以前に相原たちのプランを聞いてしまった女子を説得するために、相原がそのプランのことを女子に話した。そして、女子にも手伝ってもらうことになった。決行日の一週間前、相原がみんなに何を準備すべきかを話した。エレキングである谷本に大人たちの様子を見てもらったり、女子にスケットになってもらったりした。相原がそういうことを考えておくことが英治たちを感心させたのだった。

一学期最後の日になると、みんなが解放区に立てこもり始めた。七時になると、大人たちに FM で放送を始めた。「炎のファイター」がラジオに流れてきたとき、大人たちにすぐに「日大全共闘」のことを思い出させた。それが終わったら、相原の声が流れ出した。明日も放送するから、聞くようにと大人たちに伝えた。放送が終わった後、みんなの間に少し緊張が流れて、ケンカし始めた子供たちもいたが、それは相原によって止められた。「大人たちとの戦いであることを、忘れちゃいけない！」と相原が言った。しばらくすると、友達の柿沼が来ていないことにみんな気づいて、心配していた。外にいる女子たちからの連絡で、柿沼が誘拐されたということがわかった。その後、柿沼をどうするかを相原が仲間と相談して、中尾和人の案で「柿沼の手紙がほしい」と女子

たちから犯人に伝えてもらうことに決めた。そして、解放区の仲間たちとみんな星を眺めながら話をした。

相原というキャラは、ロマンを持っていて、一度決めたことは最後までやり抜く性格だと思う。やりたいことを自由にやって、誰にも文句を言わせないのが中学生のころの特徴の一つだと思うので、相原の設定は現実的だと思う。

宗田理(2007)『ぼくらの七日間戦争』ポプラ社

作文3 登場人物の立場から論述する

HWANG, JEONGHO

授業で扱った、宗田理の『僕らの七日間戦争』。この本では主人公である「菊池英治」、また彼の母親である「菊池詩乃」の視点から話が進んでいく。そのため私はこの二人だけの視点からの話の流れの以外に、他の登場人物の視点からの話の流れが気になった。これから私は多くの登場人物の中でも主人公である「菊池英治」の親友、「相原徹」の立場から話の流れ、彼についての感想を述べる。

1 学期最後の日以前、ある日。サッカーの部活を終えて帰り道に「相原徹」は「菊池英治」にとある提案をする。それがこの物語のトリガーになる。それは子供たちの解放区を作ることだった。この計画について「徹」は「英治」に相談し、1 学期が終わるとすぐに荒川工機という、当時には使っていない会社に解放区を作ることにした。その後、「英治」とともに同じクラスの男子学生たちも計画に誘う。その過程で女子学生である「中山ひとみ」と「堀場久美子」から仲間に入れて欲しいと言われ、最初は計画がバレるかも知れないので断ったが、彼女たちの頑固な性格のせいで計画を説明し仲間に入れることにした。その後、仲間になったみんなと計画当日、1 学期の終業式に合わせて全ての準備を終えるために1 週間前から食料、生活用品などを準備した。

計画当日、午後 12 時から彼らの行跡は誰もわからない。終業式が終わってすぐに、荒川工機で仲間みんなと合流したのだろう。7 時になって、計画の一部である「解放区放送」を始める。「解放区放送」は解放区に集まったみんながどれだけ面白いのか、どれだけ幸せなのかを彼らの親たちに知らせるための放送だ。その放送を行うのが「相原徹」。放送をするときに緊張したのか、声が固くなっていた。それでも放送をうまく終えた「相原徹」。放送が終わって大人たちの反応を知るために外からの協力者である女子学生と連絡を取りに建物の屋上に向かう。協力者の名前は「橋口純子」。彼女との連絡で解放区に来なかった一人の男子学生「柿沼直樹」が誘拐されたことを知り、計画をやめるかどうかについて仲間たちと相談をする。しかし、実行したその日に計画をやめるのはダメだと言い、「柿沼直樹」をどうするのかについては仲間である「中尾和人」からの提案で「柿沼」の手紙を犯人に要求すると翌日の「橋口純子」との連絡で伝えることにする。そして解放区の仲間たちとみんな星を眺めながら話は終わる。

「相原徹」がこの計画を立てた理由はなんだろう。それは大人たちの言う通りの生活が嫌だったからに違いない。だから昔「相原」夫婦が参加してた運動について知り、それを実行して今の状

況を変えたいと思ったはずだ。塾を運営していた「相原夫婦」が相原を気にかけていなかったのもこの計画を実行させることになった原因の一つであろう。また中学 1 年生なのに 1 週間も解放区でボイコットしようとする勇気、緊張したのにも関わらず「解放区放送」を無事に終えた大胆さには驚くしかなかった。このようになるまで子供に関心がなかった親、そして子供達には親からの関心、愛が必要なものだとこの本の著者、宗田理は言いたかったのかも知れない。

引用文献

宗田理（1985）『僕らの七日間戦争』ポプラ社

登場人物の立場から論述する



本稿は宗田理(1985)で『ぼくらの七日間戦争』の「一日 宣戦布告」を取り上げ、英治の母である菊池詩乃の視点で論述する。

先月は今日から家族旅行で軽井沢に行く約束したので、英治の母である菊池詩乃は息子が帰ってくるのを待っていた。しかし、正午過ぎても姿を現わさなかった。なぜ英治が帰ってこないのか詩乃には理解できなかった。

しばらく過ごしたら、夫の英介の電話がかかってきた。心配で聞いてみたら、どちらも息子の行方が分からなかつたので、とりあえず学校に行ってみると詩乃は言った。学校で英治の同級生であるひとみに会い、英治はいつ帰ったかと聞いてみた結果、すでに帰ったと証言した。学校で何も得られなかった詩乃は校門を出たところにある電話ボックスを使って英治の友達に電話しようと思った。しかし、電話ボックスの中では蒸し暑いだけでなく、電話番号も全然思い出せなかったため、仕方なく家に帰った。そして最初に英治の友達である相原徹の家に電話をかけてみた。相原徹の母である園子が電話に出て話したが、息子はきっとどこかで遊びに行っただろうと言ったので、気にもかけていない様子だった。その後も英治の友達に電話をかけてみたが、誰もまだ帰ってきていないということが分かった。誘拐されたのではないかと詩乃は心配になって、軽井沢への旅行はキャンセルし、午後二時に英治の同級生の母親たちを詩乃の家に集めて討論することになった。母親たちの意見が分かれた上に、どこに行っても子供は見つからなかったため、まず電車の駅員などに聞くと決めた。でも駅員も21人の子供の姿を見かけなかったため、最後に詩乃を含め、母親たちは警察に通報しようという意見が一致した。そして夜七時になると、電話が鳴った。電話をかけてきた匿名の男性は放送を聞けと要求した。詩乃は他の母親たちに知らせたところ、みんな同じ電話を受けたそうだった。とりあえず放送を聞いてから対策を検討しようとした。なのに、放送は炎のファイターという詩の朗読から始まり、親たちは昔のことを思い出した。事件は複雑になりそうだ。

本書の始めでは菊池詩乃を中心にストーリーが進んだ。英治を探している間の心境の変化は本を読んでしみじみと感じ、また詩乃も母親としての行動に感心させられたので選んで作文にした。他の母親と違って詩乃は典型的な母親のような感じがして心配性だということに見える。なので、最後に詩乃は英治をいかに帰らせるのが本書の見どころの一つだと思う。

引用文献：
宗田理(1985)で『ぼくらの七日間戦争』ポプラ社

3901412 日本語総合 読む書くA 授業概要

- 【詳細】 1.0 単位 春 ABC 木曜日 1 限
【教室】 国際講義棟 9L101
【担当】 荒井 未有 (CEGLOC 日本語部門 非常勤講師)

1. 到達目標

- ・新聞記事などを読み、構成や内容を理解して適切な要約ができる
- ・物語、エッセイなどを読んで、その内容に基づく小論文や意見文が書ける
- ・読み手を意識した分かりやすい構成の文章が書ける

2. 授業内容

- ①要約：新聞記事を読んで、要約をする
②読解&作文：3つの文章を読み、内容を理解する。その後、その内容を基にした作文を書く。

3. 履修条件

外国人留学生のうち特別聴講学生(学群)が受講できる。日本語の新聞記事を読める程度の読解力と、それを表現できる作文力、漢字・語彙力が必要。日本語能力試験 N1 レベルが望ましい。

4. 授業計画

	日にち	内容	
1	4月13日	オリエンテーション、レベルチェック	
2	4月20日	記事要約1	読解1 (1) エッセイ
3	4月27日	要約1 フィードバック	読解1 (2)
4	5月11日	記事要約2	作文1 読み手を意識して論述する
5	5月18日	要約2 フィードバック	読解2 (1) 新書
6	5月25日	記事要約3	読解2 (2)
7	6月1日	要約3 フィードバック	作文2 複数の立場から論述する
8	6月8日	中間テスト (要約、読解、作文)	
9	6月15日	記事要約4	読解3 (1) 小説
10	6月22日	要約4 フィードバック	読解3 (2)
11	6月29日	記事要約5	読解3 (3)
12	7月6日	要約5 フィードバック	作文3 登場人物の立場から論述する
13	7月13日	作文集の作成 (作文1～3から選んで、修正・清書する)	
14	7月20日	期末テスト (要約、読解、作文)	
15	7月27日	期末テストのフィードバック、作文集の発表会	

5. 教材の出版

記事要約 『中上級のにはんご』 創作集団にはんご <http://www.ssnihongo.com/>

読解1【エッセイ】 ダニエル・カール（2000）「第二章 山形弁の達人を目ざして」

『ダニエル先生ヤマガタ体験記』 集英社文庫

読解2【新書】 石黒圭（2013）「第二章 地域に根ざした言葉」

『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』 光文社新書

読解3【小説】 宗田理（2007）「一日 宣戦布告」『ぼくらの七日間戦争』 ポプラ社

6. 作文の課題

<作文1> 読解1で読んだ文章について、読み手を意識して論述する

- 本を読んでいない人でも内容がわかるように書く
- 本の面白さがわかってもらえるように説明する
- 気持ちを表すときに、感情的に書かずに客観的に書いてみる

<作文2> 読解2で読んだ文章について、複数の立場から論述する

複数の立場に立って「方言を話すこと」について意見とその根拠を書きなさい。

<作文3> 読解3で読んだ文章について、登場人物の立場から論述する

- 本を読んでいない人にもわかるように書く
- 一人の登場人物から論述する（途中で他の人の立場にならないように注意する）
- 「やりもらい」表現や、「いく/くる」、受身表現に注意して書く